

ISSN 0910-2396

# 野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第149号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成19年9月21日

カリガネ



2006. 4. 22 美唄市宮島沼

撮影者 岩崎孝博 (札幌市北区)



も く じ

ハクガン青色型の記録	広 報 部	.....	2
ヘラサギ(長都沼)とクロツラヘラサギ(石狩河口)	広 報 部	.....	3
サロベツ原野のタンチョウ	天塩郡幌延町 富士元寿彦	.....	4
誰も知らない北海道マガン越冬12年	日高郡新ひだか町 谷岡 隆	.....	6
北海道におけるキビタキの繁殖期の分布	美唄市 藤巻 裕蔵	.....	10
鳥好きの文学散歩8 道東の文学碑	札幌市手稲区 高橋 良直	.....	11
[ 閑話 ] 野鳥あれこれ ヤンバルの森	札幌市豊平区 戸津 高保	.....	12
探鳥会ほうこく	.....	.....	12
探鳥会あんない	.....	.....	16
鳥 民 だ よ り	.....	.....	16

## ハクガン青色型の記録

### 広 報 部

日本には数の少ない冬鳥として飛来し、北海道でも春秋の渡り時期にマガンの群れに入って見られるハクガン(亜種ハクガン)は、風切羽の一部だけが黒く、それ以外は全身が白い白色型ですが、首から上だけが白い青色型も極めて希には飛来します。青色型はまるで違った種のように見え、アオハクガンと呼ばれることもあります。分類学上では白色型と同じで、別亜種扱いもされていません。クロサギに黒色型と白色型がいるのと同じです。

そのハクガン青色型の記録が会員の早川いくこさんから寄せられましたので、ここで紹介します。

場所は空知郡南幌町中央公園の南側の水田で、今年2007年の3月26日午後3時過ぎのことです。コハクチョウ28羽と一緒に採餌しているのを見つけ、写真撮影をしました。この日およびその前後には、たくさんのマガンが飛んでいたとのこと。写真はかなり遠くからなので少々不鮮明ですが、2羽のコハクチョウの右手前に、首から上だけが白く、他の部分は暗灰青色あるいは褐色の、コハクチョウより一回り以上も小さいハクガン青色型が認められます。

北海道でのハクガン青色型の記録として、1976年3月31日にウトナイ湖で、また1988年4月23日～5月3日に宮島沼での2例があります(藤巻裕蔵、2000、北海道鳥類目録改訂2版ほか)。ただし、ウトナイ湖の個体については、マガン若鳥の部分白化個体とする考えもあるようです。

付け加えるべきことがあります。4月5日の北海道新聞朝刊地方版(主に空知方面)に、「深川の水田でミカドガン撮影」という小さな記事が写真付きで掲載されました。

撮影日は3月30日でした。ところがこれはミカドガンではなく、まさにハクガン青色型でした。撮影された方とも連絡がとれ、誤認の了解をいただきました。めったに飛来する鳥ではありませんから、南幌町でのものとおそらく同一個体だろうと推測されます。深川市では市内音江町向陽の水田でやはりコハクチョウの群れに交じって採餌していたそうです。26日に南幌町、30日に深川市、地図上では70～80kmの距離で、そのちょうど中間点あたりに宮島沼があります。でも、宮島沼周辺の水田での目撃記録は得られていません。

初めのところで、ハクガンはマガンの群れに入ると書きましたが、このハクガン青色型は、マガンよりもコハクチョウと一緒にの方が好みだったのかもしれない。



ハクガン青色型 2007. 3.26 空知郡南幌町

# ヘラサギ(長都沼)とクロツラヘラサギ(石狩河口)

広 報 部

北海道では記録が少ないヘラサギが6月中旬に長都沼で、また、クロツラヘラサギが7月中旬から長期間、石狩河口近くで観察されました。どちらも2羽ずつでした。複数羽が同時にという記録は初めてのことです。

過去におけるヘラサギの記録は「北海道野鳥だより」第143号(2006)に、またクロツラヘラサギの記録は第137号(2004)にそれぞれまとめて載せていますが、その時点においてはどちらも10例前後でした。その後記録が増えていくかもしれませんが、北海道では希にしか見られない鳥であることには変わりはありません。

ヘラサギ：千歳市在住の青柳郁子さんと島崎康広(愛護会会員)さん、および恵庭市在住の菅原恵子さんから観察記録と写真が寄せられました。3人の方々はお知り合いで、最初に青柳さんが見つけました。場所は千歳市長都沼で、2007年6月15日の午後3時少し過ぎに2羽が並んで餌を食べているのを見つけ、午後4時過ぎまで観察・写真撮影をしました。その間、2羽は寄り添ったり、少し離れたりしながらの採餌や休息、時にはあたかも求愛行動かと思われるような、嘴のくっつけ合いや互いの羽繕いをするこもあったとのことです。



ヘラサギ

2007. 6. 17 長都沼 菅原恵子さん撮影

翌日、翌々日には知らせを受けた島崎さん、菅原さんも長都沼に行き、やはり観察や写真撮影をしました。長都沼に滞在したのは17日までの3日間とみられ、18日には見られなかったそうです。3日間、2羽は常に一緒に行動していたということです。

クロツラヘラサギ：岩見沢在住の会員である佐藤幸典さんから広報部に「クロツラヘラサギ2羽を見つけました」と

いう知らせが入ったのは、2007年7月19日の正午過ぎのことでした。これについてはその4日前の15日に、開設者個人名不詳のブログ(日記風ウェブサイト)に写真付きで載っていました。場所などは記されていないのですが、佐藤さんがおよその見当で探したところ、石狩河口橋から数百メートル下流の通称「石狩八幡干潟」にいるのを見出しました。すぐに当会会員などに知れ渡ることになり、多くの人によって、観察・写真撮影されました。



クロツラヘラサギ

2007. 7. 20 石狩八幡 佐藤幸典さん撮影

2羽は常に行動を共にし、石狩川右岸寄りに八幡干潟とその下流側2~3kmの範囲を行ったり来たりし、浅いところでの採餌や休息、また川の中に突き出た流木上での休息を繰り返していたとのことです。滞在は長期に渡り、8月19日の当会石狩川河口探鳥会でも確認されています。

ヘラサギもクロツラヘラサギも2羽ずつだったのですが、番い(つがい)かどうかの判断はできません。クロツラヘラサギについては2羽とも初列風切先端が黒いことが認められており、幼鳥とみなされています。ヘラサギについては成幼の区別はできていません。両種とも基本的には九州を中心に少数が越冬するだけで、日本での繁殖はまず考えられません。明確な根拠はありませんが、たまたま2羽ずつ迷行したものとしておき、それ以上の推測はしない方が無難と考えられます。

## 参考資料

北海道野鳥愛護会広報部. 2004. クロツラヘラサギ道内移動. 北海道野鳥だより137: 8-9.

北海道野鳥愛護会広報部. 2006. 2005年夏ヘラサギ鶴川河口に長期滞在. 北海道野鳥だより143: 3-4.

## サロベツ原野のタンチョウ

天塩郡幌延町 富士元 寿彦

サロベツ原野で確認されたタンチョウの繁殖は、道東地方以外の地域では、百年以上記録されていなかっただけに、関係者を喜ばせてくれました。そして、今後の動向が注目されています。サロベツ原野で、タンチョウが見られるようになってから5年ほどになりますが、その経緯を紹介します。

2002年5月25日の夕方、天塩川の合流点方向より、サロベツ川沿いに飛来した2羽のタンチョウが、近くの湿原に舞い降りました。これが、新天地を求め、サロベツ原野にやって来た若い夫婦と、私の最初の出合いです。このまま居着いてくれることを願い、そっと見守っていると、その後も大きな移動はせず、原野に止まってくれました。すっかりここが気に入ってくれたようです。

この年は、半年ほど暮らした後、11月に入ると間もなく2羽の姿が見られなくなりました。生まれ故郷の道東地方に、越冬のため渡って行ったようです。

翌年の春先、タンチョウ夫婦が再び渡来するのを期待し、雪解けが進む原野に通った結果、4月下旬ようやく帰ってきた夫婦に出合えました。そうすると、「上手くいくとサロベツ生まれの二世誕生？」と、勝手によい夢が膨らんだのですが、残念ながら、この年、繁殖はしませんでした。まだ若すぎたみたいです。



初めて育った幼鳥2羽を連れた家族。手前の幼鳥の背面上部に目印となる斑紋がある。 2005.11.21



利尻山をバックに採餌中の目印のある幼鳥とメス親  
2005.12.8

サロベツ原野で、この夫婦の営巣が初めて確認されたのは、翌年の2004年になってからです。しかし、この年には、孵化後30日ほどのヒナ1羽を連れた夫婦が確認された後、ヒナの姿が見られなくなってしまいました。道東地方以外の繁殖は、百数年ぶりの記録になる待望のヒナ誕生だったのですが、この年の繁殖は失敗に終わってしまったのです。ヒナは天敵に捕食されてしまった可能性が高く、大変に残念な結果となりました。

2005年、前年の近くの湿原に作られた巣で孵化したヒナは2羽。前例があるので、心配しましたが、今度は順調に成長してくれました。秋になると、湿原の奥で無事に育ち、飛べるようになった幼鳥2羽を連れた夫婦が、時々人目につく場所に姿を現すようになったのです。いつも家族4羽で仲睦まじく行動しているのを、微笑ましい思いで見ていると、体が小さい幼鳥の羽毛に特徴となる目印があるのがわかりました。このメスと思われる幼鳥には、背中の上・首の付け根近くの部分に茶褐色をした斑紋状の模様があるのです。この模様で個体識別が可能で、上手くいけば越冬地と給餌場所もわかりそうです。

タンチョウの研究の権威者である正富宏之先生をキャップとした「サロベツのタンチョウ親子の渡りと越冬地を調べる」プロジェクトチームが即できました。渡りを目前に控えた11月下旬、道東地方のタンチョウ観察・研究者に手配書ならぬ電子メールで「目印のある幼鳥」の写真は送られました。

12月15日朝、すっかり銀世界に変わったサロベツ原野からタンチョウ親子は、南東方向に向かい飛び去りました。進路はそのまま行くと、天塩川を上流部の山間部に向かっています。「真つすぐに寄り道をしないで飛んで行くと、今日の夕方には道東地方の越冬地に到着するのだろうか？」





日没後、夕焼け空を峠に向かう親子 2006.10.24

「それとも幼鳥が一緒だから途中で何回か休息して、何日もかけて行くのだろうか？」などと思いながら、姿が見えなくなるまで見送りました。そして、すぐに正富先生への一報。いよいよプロジェクトチームの作動です。

翌々日、正富先生から意外な知らせが届きました。前日、幌延町雄興のKさん宅の近くで「ウオンテッド親子」が目撃されているというのです。飛び立ったサロベツ原野からは、直線距離にすると20kmほどの場所。翌日の18日、目撃された地区の付近を探し回ったのですが、確認できませんでした。尚、後日になって聞いた話ですが、この日の夕刻、Kさん宅から10kmほど南にある中川町歌内で、南ではなく北に向かって飛ぶ「ウオンテッド親子」と思われる4羽のタンチョウが目撃されていました。その後、目撃情報は途絶えましたが、12月23日、道東地方の鶴居村にある給餌場「鶴見台でサロベツのタンチョウ家族」確認の知らせが届きました。その後、冬の間ずっとこの給餌場で親子は観察されています。

2006年4月14日、天塩町振老の雪が解けた天塩川近くの牧草畑で、仲良く餌探しをしている2羽のタンチョウ若鳥がいました。少し小さい個体の背中には、大分薄くなっていますが、例の斑紋が見えます。サロベツ原野で昨年生まれた兄妹に間違いありません。『少し前に家族でこちらに帰って来てから「子別れ」があったようだ。』という見方がされています。両親は、あちこち探し回ったのですが、見つけることができませんでした。人目につかない原野の湿原で繁殖行動に入っているように思われました。

6月5日、ヘリコプターによる上空からの「タンチョウの繁殖状況調査」が行われました。昨年と一昨年に作られた巣がある近くの湿原に、今年も営巣しているとはばかり思っていたのですが、いくら探しても見つかりません。原野はもちろん、原生砂丘林間と天塩川流域の営巣可能なヨシ原が広がる低層湿原帯を広範囲、かつ丁寧に探したが、とうとう見つかりませんでした。今年は原野も積雪が多く、雪解けも例年になく遅かったので、昨年までの営巣場所の湿原が融雪水で浸かってしまい、巣作りができなかったのかもしれない。それで、上空からは見えづらい、ヤチハンノキが生えたヨシ原で営巣した可能性があるという推理もされました。

夏、タンチョウ親子との出合いを期待して湿原に通ったのですが、残念ながらいつも空振りでした。

9月に入り、初秋の気配が感じられるようになると、サハリン経由で渡来したガンやカモたちで、サロベツ原野は賑わい始めます。日毎に増加して大群になっていく(オオ)ヒシクイの親子を見ている内「今年、タンチョウの繁殖は失敗したのかもしれない。」と次第にあきらめの気持ちが強まります。そんな矢先の9月下旬、今年生まれた1羽の幼鳥を連れた親子が見つかりました。幼鳥は既に上手く飛べるようになっており、体も母親と同じくらい大きくなっています。「今年も無事に子育てが成功していた！」先日までの気持ちは一転し、喜びが込み上げました。と同時に、改めてサロベツ原野の広大さと、懐の深さを思い知らされた次第です。タンチョウのように大きくて目立つ存在の鳥の子育てでさえも、今まで確認できずにいたのですから。

その後、親子3羽は殆ど毎日観察できましたが、11月30日が終認となりました。タンチョウの夫婦は大変に仲睦く、どちらかが死ぬまでずっと連れ添うが、オスに先立たれて再婚したメスは、新しい相手のオスの繁殖地で暮らすようになるそうなので、オスには無事に長生きしてほしいものです。サロベツ生まれの若鳥たちですが、メスは伴侶となるオスの元に行ってしまうので、サロベツのタンチョウ三世誕生は期待できないようです。しかし、オスは嫁さんを連れて帰って来る可能性が高いので、今後を楽しみにしています。

2007年3月24日、興部町内の上空を幼鳥1羽を含む3羽のタンチョウが同町のKさんにより確認撮影されました。この3羽は、北に向かって飛び去ったとの事ですが、前年のサロベツ一家3羽の可能性が高く思われます。



湿原のヨシ原で休息中の親子 2006.11.9

今年もこちらに帰ってきてから、「子別れ」をしたと考えられていますが、春先にサロベツでの目撃情報はありませんでした。しかし、昨年同様、人目につかない場所で、採餌と巣作りをしていました。

5月8日、環境省のヘリコプターによるタンチョウ調査があり、サロベツ原野で抱卵中の親が確認されたのです。今年も無事に育ってくれることを願っています。

## 誰も知らない北海道マガン越冬12年

日高郡新ひだか町 谷岡 隆 (日本雁を保護する会会員)

地球温暖化に起因し、平成7年12月以降、それまで越冬の北限であった宮城県伊豆沼から一気に400kmも北に位置する北海道新ひだか町静内(旧静内町)に国指定天然記念物マガンが越冬するようになり、以後、連続して越冬を続け、早いもので12シーズンを経過した。

振り返れば、当時、北海道でのマガン越冬は誰一人、想像すらしたこともなく、事実、そのような事例もなかったことから平成7年12月から平成8年3月までの93日間、マガンとヒシクイ計41羽が新ひだか町静内(旧静内町)で初越冬したという報告がなされた時、日本雁を保護する会会地正行会長も驚き、その事実を告げられると電話口で何度も本当なのかと問いただし、私は「本当です。観察記録もあるし写真、ビデオも沢山撮っています」と答えた。

このことを聞きつけた毎日新聞北海道支社は早速、鈴木写真部長自らが取材に訪れ、年季の入ったニコンで撮影、その記事と写真は越冬途中ではあったが、平成8年2月22日、東京本社発行の全国版朝刊一面に、「北海道でマガン越冬」の見出しと四段抜きカラー写真で紙面を飾った。いわゆる“毎日が抜いた”スクープである。

さて、話を本題のマガン越冬に戻すが、マガンは土地の執着性が強く、一度決めた場所には毎年越冬地として訪れ採食を繰り返すのが一般的であるが、例年続く異常気象に起因、マガンはこの変化に敏感に反応すると同時に、激変する気候に翻ろうされながら、個体数、採食地、越冬期間を変化させている。

以後、12年を経過、越冬データを整理すると一定の行動パターンが確立されていることに気付くが、今回は新ひだか町静内での越冬実情及び北海道内でのマガン越冬をまとめてみた。

### 1. 越冬期間・個体数(新ひだか町静内)

- 1シーズン目/平成7年12月22日～平成8年3月24日(93日間)、42羽(マガン41羽、ヒシクイ1羽)
- 2シーズン目/平成8年12月29日～平成9年4月25日(118日間)、30羽(マガン30羽)
- 3シーズン目/平成10年1月6日～平成10年3月24日(78日間)、34羽(マガン33羽、シジュウカラガン1羽～標識鳥)
- 4シーズン目/平成10年11月30日～平成11年3月22日(113日間)、48羽(マガン47羽、ヒシクイ1羽)

- 5シーズン目/平成11年12月21日～平成12年3月22日(93日間)、68羽(マガン63羽、シジュウカラガン4羽、ハクガン1羽)
- 6シーズン目/平成12年12月6日～平成13年2月23日(80日間)、56羽(マガン53羽、シジュウカラガン1羽、オオヒシクイ1羽、ハクガン1羽)
- 7シーズン目/平成13年11月29日～平成14年2月22日(87日間)、122羽(マガン121羽、ヒメシジュウカラガン1羽)
- 8シーズン目/平成14年12月17日～平成15年2月24日(70日間)、113羽(マガン113羽)
- 9シーズン目/平成16年1月14日～平成16年2月28日(46日間)、105羽(マガン104羽、ヒシクイ1羽)
- 10シーズン目/平成16年12月28日～平成17年3月18日(81日間)、147羽(マガン147羽)
- 11シーズン目/平成17年12月8日～平成18年2月18日(73日間)、15羽(マガン15羽、最大確認数172羽)
- 12シーズン目/平成19年1月16日～平成19年2月22日(38日間)、83羽(マガン81羽、シジュウカラガン2羽、最大確認数243羽)

### 2. 誰も知らない観察実情

新ひだか町静内でのマガン越冬の一つの特徴は、100羽程度と少ない越冬数の割合には希少種であるシジュウカラガンが4シーズン、ヒメシジュウカラガンが1シーズン、



降雪があり仕方なく水田のあぜ道で雑草を採餌  
(新ひだか町静内)

ハクガンが2シーズンも越冬していることである。

その年にもよるが国内での越冬数がシジュウカラガンは例年5羽程度、ハクガンも10羽程度であり、少し前まではそれぞれが1万羽に1羽と言われていたことを考えると、まさに例外的な数値であり、希少種の越冬地というもう一つの側面も浮き彫りになってくる。

しかし、保護する立場から言うと、希少種が来ればトラブルが発生することが多く神経を使うことも多い。当然、報道機関、野鳥関係者（観察、写真）との対応も避けられないので、観察する楽しみはあっても正直なところ希少種は来て欲しくないというのが本音である。

新ひだか町は全国一の軽種馬（サラブレッド）生産町であり、町の基幹産業が軽種馬生産である。ご承知のとおりサラブレッドの餌は牧草であるがマガンも同じ牧草である。つまり、サラブレッドとマガンは同じ場所で同じ物を食することになる。



今シーズン越冬したシジュウカラガン2羽  
(新ひだか町静内)

一頭、数百万円は安い方で、大方は数千万円、中には数億円するサラブレッドも珍しくないサラブレッドであることから、万が一この馬に怪我でもあったら大変なことになる。

事実、マガンが一斉に飛び立つ羽音に驚き牧場内を走り回るサラブレッドも多く、バードウォッチングと称し大勢の人が牧場内に駆けつけ、何かの物音やしぐさが原因でサラブレッドが暴走、怪我を負うということも想定される。

では最悪、事故が発生した場合、誰がどのような形でこの数千万円の商品を補償し賠償するのか。更に伝染病からサラブレッドを守る防疫上の理由も重なり、牧場経営者は部外者の牧場内への出入りを極端に嫌う。つまり、希少種が来られては困るというのはこのことなのである。

従って静内では、マガンが牧草を採食するため牧場内に入らなければ観察は出来ず、牧場主に特別に許可を得た後、初めて観察が可能となる。

当然のことながら牧場経営には全く関係のない要件で私有地へと入るので、牧場には地球温暖化に関連したマガン観察の意味合い、必要性等を説明した上で幸いにもご理解を頂き観察が成り立っている。

実際、私の勤務先（新ひだか町役場）に「金にならない（利益にならない）鳥を追っている奴がいると聞いたが、ここにいるか…」と怒鳴りこんで来た牧場関係者もいたが、単に野鳥観察と言っても、リスクが絡むと簡単にはいかない。

しかし、中には理解を示していただく方も存在する。大雪が降りマガンが採食できないと判断、誰に頼まれた訳でもないのにトラクターで牧草地の除雪をしてくれる牧夫さんもあり、本当に有難いと感謝している。

これまでの12シーズン、牧場関係者のご理解、ご協力がなければ間違いなく静内地区のマガン越冬は可能とならなかった、と言っても過言ではない。

### 3. 越冬地

11シーズン目こそ隣町の新冠町で越冬したが、それ以外、12シーズンを通した越冬地は新ひだか町静内である。また、採食地は大きな移動はなく、新ひだか町内の半径6km以内でその年の降雪量、気温等の変化に即応し、その時点で最も採食条件の良い場所を選定し、採食している。

ねぐらに関しては、新冠町での越冬以外は全て静内川の中洲を利用、毎年、微妙に川のロケーションが変化するため多少は移動するが、ほぼ同一場所にねぐらを求め、日没のねぐら入りから夜明けの飛び出しまでの間、一塊となりねぐらをとる。

### 4. 採食

基本パターンは、早朝の日の出と共に静内川のねぐらから採食地へと向かい、一日中、採食行動を繰り返し日没と同時にねぐらへと帰る。当然、行動は群れ全体での統一行動



牧場ではいつもサラブレッドと仲良く採食  
(新ひだか町静内)



となる。また、ねぐらと採食地との距離はおおよそ数キロ程度である。

行動については、まず早朝はまどろみ状態が続くも、午前9時以降から活発な採食活動に移り、お昼頃、一度休眠を取り、午後からまた採食。一日の大半を採食行動に費やす。また、日没1時間程度前から採食活動が活発になる。

採食物は12月～2月が牧草、3月に入ると稲藁・落ち穂等の米系統に移行する。これは、渡り時期に必要なカロリーと関係し、渡りが近くなるに従いカロリーの高い米系統を食する。



昨年は記録的な大雪でサラブレッドも採食に一苦労  
(新ひだか町静内)

しかし、ここ数年は2月下旬に採食地を新ひだか町静内から鵠川町へと移動してしまうので詳しくは不明ではあるが、鵠川町内に相当の牧草地があるにも関わらず、私が見た限りでは鵠川町での採食地は全て水田である。

水分補給は、餌の周辺にある水溜りや融雪した水を飲む。しかし、越冬1～2シーズン、静内川の中洲に降りては川の水を飲んでしたが、その後この光景を見ていない。

新ひだか町静内での採食地は、シーズン毎に微妙に場所を移動させている。マガンが採食地として選ぶのには幾つかの条件があるように思えるが、以下はその特徴的な事項。  
○サラブレッドの放牧地、採草地など餌となる牧草が豊富にある場所。

○周辺に障害物がなく、平坦で見通しがきく場所。これは人間、キツネ、犬などの天敵から身を守るために安全な環境を選定した結果。

○採食地となる場所は、近くに道路や人家、馬の厩舎等を避けて選定すると思えるが、どういう訳か実際はその逆で、むしろ建物や人が住む環境下に採食地がある場合が多い。

○当然のことながら牧草がある場所はサラブレッドが放牧されている場合が多いが、争うなどの事例はなく仲良く共生している。

○採食地移動の理由は、越冬当初はマガンに対するいたずらや犬を放すなど、全て人為的なことが理由となってい



今シーズン初めてウトナイ湖で越冬したマガン  
(苫小牧市)

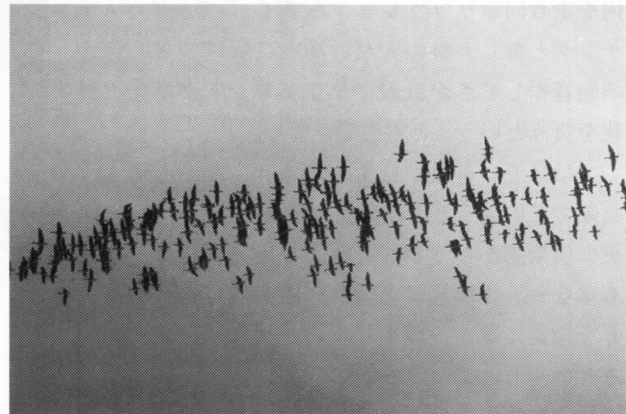
た。しかし、近年は降雪量が多い、気温が低すぎるなど、異常気象による採食環境悪化が原因となっている。

### 5. フライウェイ（渡りルート）

静内地区への渡りのルートは、秋はシベリア～美瑛・宮島沼～ウトナイ湖～新ひだか町静内と移動し、春はその逆ルートとなっている。特に秋は、ウトナイ湖に渡ってきた群れの内、最後まで残留している群れがそのまま静内地区へ移動していたが、ここ数年はその組と本州へと移動する組とに別れ、同一日に旅立ち、移動地にそのまま越冬する。

道内でのルートの特定は、過去にシジュウカラガンが5度越冬した際、標識鳥として確認された場所を点として記録、その点と点を線で結んだ結果、判明した。

しかし、ここ数年、異常な降雪量、寒さなどにより採食環境が悪化したため、一旦、静内地区へと移動し越冬を開始した途中でも本州へと渡ったり、越冬中でも新ひだか町静内から鵠川町間、ウトナイ湖から新ひだか町静内間、新ひだか町静内から新冠町間をそれぞれ往来していることも分かっている。これは、渡りが近づく2月中旬から顕著に現れ、上空での滞空（飛翔）時間も序々に長くなり、それに伴い地上での採食時間が短くなる。



平成19年1月3日、マガン500羽以上を確認  
(苫小牧市)





昨シーズン採餌の大半は「新冠町泥火山」となった  
(新冠町)

## 6. 北海道での越冬状況

平成7～8年、北海道静内地区で初めて越冬をしたが、その後、5シーズン目(平成11～12年)、日高管内浦河町・様似町でマガン幼鳥2羽。7シーズン目(平成13～14年)、胆振支庁管内鶴川町でマガン10羽(幼鳥3羽・成鳥7羽)、11シーズン目(平成17～18年)、マガン11羽(幼鳥1羽・成鳥10羽)、ヒシクイ3羽(幼鳥3羽)の計14羽が浦河町で越冬した。

また、胆振支庁管内伊達市でも平成11年、マガン3羽が越冬を開始して以来、越冬を続け平成14年～15年59羽、平成18～19年89羽と増え続け、9シーズン連続し越冬を続けている。

新ひだか町静内との越冬パターンと基本的には相違はないが、静内へはウトナイ湖より数十羽の大きな群れで一度か多くても二～三度で移動して来るのに対し、伊達市は小刻みに数羽(ファミリー)か十数羽の群れで徐々に飛来、気がつくともマガンが増えていたというスタイルであるのが興味深い。

なぜなら、通常マガンは小群での行動はとらずに集団(群れ単位)で行動するのが習性であり、この現象が一シーズンであれば過渡的と片付けられるが、例年このパターン



浦河町でもマガンが2シーズン越冬  
(浦河町)

を続け、今シーズンを例にとると平成18年11月18日26羽、11月19日44羽、12月3日72羽、12月16日87羽、12月28日89羽という具合である。

初認が平成18年11月18日以降、異動があったのが11月19日、12月2日、12月3日と続くように伊達市へと移動して来る日が静内地区より1～2カ月早いのも面白い。このことは、少なくとも静内へのフライウェイとは相違していることを示し、そのルートがどのようなものか大変興味深いものがある。

地理的なことを考慮すると、通常の渡りルートより西に外れておりサロベツからの南下なのか、十勝からの移動か、美唄・宮島沼或いはウトナイ湖からの移動なのか。また、これら各地からの集合なのか。しかも数羽から十数羽単位で、なぜ小刻みに期間を置く必要があるのか不思議であり、解明に値する要素が集積されている。

更に今シーズン、苫小牧市ウトナイ湖で平成19年1月3日、500羽以上。1月20日、330羽以上。そして1月27日まで群れの採食を私が確認。2月3日には日本野鳥の会調査でマガン109羽が確認されており、今シーズン、ウトナイ湖で初めてマガンの越冬が確認されたが、この外、豊浦町貫気別川河口でも幼鳥と思われるマガン一羽が越冬した。

越冬は、沼が結水しないためねぐらが確保され、積雪も少なく採食が可能となったことに起因しており、マガンはウトナイ湖から本州へ南下することなく越冬した。

この事象は、場所が日高支庁管内、胆振支庁管内に限定されており、温暖な気候であることが共通しているが、越冬に必要なねぐら及び採食物の確保という二つの条件さえ整えば、新ひだか町静内以外でも越冬することを示唆しており、今後、越冬地の北上傾向は個体数の増加と重なり、地球温暖化がストップしない限り拡大すると予測される。

## 7. おわりに

平成7年、突然、静内へとマガンが現れて以来、今ではすっかりマガンに魅せられてしまった一人として、越冬が安全に遂行できるよう見守り、その原点となるべきものは観察活動であるとの思いで12シーズンが過ぎた。

今後、人材の養成、組織の立ち上げ、科学的な諸事項の立証、越冬行為の啓発など、解決しなければならない課題も多い。

しかし、平成9年12月、地球温暖化防止京都会議(COP3)のワークショップで、温暖化が我が国の野生動物に与えた唯一の例として、秋田県小友沼と共に静内での越冬が全世界で紹介されたように、多くの人が注目しているこの事象を、この町に住む者としての責務として、マガンとの共栄共存を模索、静内を核とする北海道でのマガン越冬を根付かせたいと考えている。

## 北海道におけるキビタキの繁殖期の分布

美唄市 藤 卷 裕 蔵

キビタキは5月中旬に渡来する夏鳥で、日本のヒタキ科ではこのキビタキとオオルリの2種が森林でよく観察される種である。しかし、2種とも同じ森林性ではあるが、生息状況には少し違いが見られるようである。今回はこれまでの自分の調査結果と各種報告書などの記録を用いて、キビタキの繁殖期の分布についてまとめた。次回はオオルリについて述べ、これら2種について比較する予定である。

調査方法、使用したデータ、まとめ方については、カケス(121号)やコムクドリ(130号)の場合と同じなので省略する。ただしその後にも調査を続けており、2007年までに調査した区画(5×5km)の数は769、調査路数は862となっている。分布については全てのデータを用いたが、生息環境別と標高別の出現率、観察個体数については上記の区画と調査路で調べた結果だけを用いた。

### 分 布

図1に、10km四方の区画を単位として繁殖期のキビタキ

の分布を示した(観察結果は5×5kmの区画で記録しているが、この区画で表示すると細くなるので、10km四方で表示)。分布図を見ると、キビタキは山間部のほか、石狩平野や十勝平野など農耕地や住宅地の多い平野部にもかなり広く生息している。これは、後述のように、キビタキは小面積でも林があれば生息するためである。また、西部と東部とで分布状況に違いはないようである。この点について具体的には後述する。

### 生息環境と観察個体数

生息環境別に出現率(全調査路数に対するキビタキが観察された調査路数の割合)をみると、キビタキはハイマツ帯では出現せず、常緑針葉樹林で67%、針広混交林で75%、落葉広葉樹林で82%、カラマツ人工林で50%で、森林のタイプによって出現率が異なっており、カラマツ人工林で低かった(表1)。また、調査路2km当たりの平均観察個体数は、常緑針葉樹林で $0.7 \pm 1.1$ (平均値±標準偏差)、針



図1. 北海道におけるキビタキの繁殖期の分布  
一つの区画は約10km四方で、1/25,000の地形図に相当する。  
●=生息が確認された。○=調査したが観察されなかった。・=未調査

広混交林で1.6±1.8、落葉広葉樹林で1.6±1.7、カラマツ人工林で0.6±0.9で、常緑針葉樹林とカラマツ人工林で少なかった。これはキビタキがおもに落葉広葉樹を利用するためであろう。森林以外の環境でもかなり観察され、出現率は農耕地・林で58%、農耕地で27%、住宅地で17%であった(表1)。ここでの環境区分では、調査路沿いの林

表1. キビタキの生息環境別・標高別の出現率(%)

生息環境	調査路数	標高(m)					全体
		~200	201~400	401~600	601~800	801~	
ハイマツ林	11	—	—	—	—	0	0
常緑針葉樹林	15	80	67	100	33	67	67
針広混交林	150	64	84	79	79	54	75
落葉広葉樹林	175	81	87	80	67	50	82
カラマツ人工林	22	63	36	67	—	—	50
農耕地・林	217	56	61	86	100	—	58
農耕地	246	25	35	50	—	—	27
住宅地	30	15	0	50	—	—	17

の占める割合が20%以上の場合を「農耕地・林」とし、それ以下の場合を「農耕地」としているの、「農耕地」といってもまったく林がないわけではなく、「住宅地」の場合も公園などの緑地がある場合がある。キビタキはおもに森林に生息するが、農耕地や住宅地でも樹木の多い公園、防風林、小面積の林があれば生息するので、上記のように森林以外の環境でも観察される。

以前紹介したヒヨドリ(本誌136号)では東部で出現率が低くなる傾向があったが、キビタキについてこの点をはっきりさせるため大雪山系と日高山脈を境にして調査路数が多く、かつ出現率が高かった環境区分で東西を比べてみる。出現率は針広混交林の西部85%、東部67%、落葉広葉樹林

の西部84%、東部76%、農耕地・林の西部52%、東部58%で、東西の間で有意な違いはなかった。

標高別の出現率については、森林4タイプと農耕地・林に限ってみると、200m以下では65%、201~400mで74%、401~600mで80%、601~800mで72%、801m~では27%で、標高800m以下では普通に生息しており、801m以上で出現率が低くなった。

まとめると、キビタキは北海道全域にほぼ一様に分布しており、森林の鳥であるが標高800m以下で小規模の林があれば森林以外の環境でも生息し、ポピュラーな鳥の1種といえるだろう。

## 鳥好きの文学散歩 8

## 道東の文学碑

札幌市手稲区 高橋良直

この「散歩」の中で以前に小樽の文学碑を取り上げたことがあった。その後時々文学碑を調べているが、道内にはずいぶんとたくさんの文学碑がある。正確なことは分からないが、その数は500基を超えるだろう。今回は、私が実際に見たことのある文学碑で、野鳥がうたわれているものを紹介してみたい。

網走支庁管内の旧生田原町(現在は合併して遠軽町)にはオホーツク文学碑公園という珍しい公園があり、ここにはオホーツク地方にゆかりのある文学作品の碑が17基ほど並べられている。この中に本道短歌界の重鎮である山名康郎氏の歌碑があり、「わが頭上過ぎたる影はオホーツクの/流氷原を舞ふ尾白鷺」と刻まれている。青空の中を悠然と飛翔するオジロワシの様子が目に浮かぶようである。

同じく網走管内の置戸町の鹿の子ダム湖畔には長田幹彦の句碑がある。長田という人は大正から昭和前期に活躍した文人であり、「続金色夜叉」の作者として知られている。北海道と縁があったわけでもないのに、なぜこの人の句碑

がここにあるのかは分からないが、句はリズムカルでよい。「凍林の雪に声あり渡り鳥」。声が聞こえるのはツグミかなにかであろう。ところで、鹿の子ダム周辺は、ちょっとした鳥見のポイントで、野鳥の会オホーツク支部の探鳥会が開かれており、しばしばクマガラなども観察されているようである。

別海町尾岱沼市街の国道脇(海側)には大町桂月の句碑がある。「網を干す棒や烏鴉の物語り」。漁網を干すための棒組みにカラスやカモメが集まり、語らっているのであろう。大町は明治、大正期の文人で、大正10年に来道しており、「層雲峡」の命名者として知られている。

最後に帯広市緑ヶ丘公園にある早川観谷の句碑。早川は十勝地方で活躍された俳人である。「朝曇るしずけさどこか鳴く郭公」。住宅地に囲まれたこの公園でカッコウの声が聞こえることは現在はないと思うが、筆者は転勤で帯広に住んでいたことがあり、この公園でしばしばコアカゲラを見たことを懐かしく思い出す。

## 【閑話】 野鳥あれこれ ヤンバルの森

札幌市豊平区 戸津高保

今年、5月25日から30日まで、探鳥で沖縄本島と石垣島を旅行してきました。那覇の出版社に甥が勤めていて、ヤンバルのカエルや昆虫の写真を趣味にしています（今や趣味を超えている？）。彼が今回の旅行の案内役をしてくれました。

ヤンバルの森は沖縄本島の北部にあり、本島全体のおよそ1/5程の面積です。私達が行った時は、この森に白いイジュの花が丁度盛りと咲いていました。ここでは、世界中でこの小さなヤンバルの森にしか見られない鳥・昆虫・両生類などの動物達が生息しています。

5月26日、甥の運転でヤンバルの森に入りました。丁度、小雨が上がった森の中で、木の枝に動いている鳥を見つけました。車を降りてみるとノグチゲラです。餌を探しているのか、あまり大きく移動しないので、しばし観察。すぐ側でアカヒゲ（ホントウアカヒゲ）が鳴きました。アカヒゲの声はコルリとよく似ています（チツツの前奏はなし）。

少し離れた森の中からサンコウチョウとアカショウビンの声が聞こえてきます。さらにサンショウクイのペアーが飛んできて、近くの木に止まりました。霧にかすむヤ

ンバルの森で、なんとも夢のようなひと時でした。

車で、森の中を移動していると、2回ほどヤンバルクイナが道路わきに姿を見せ、近くのダム森では鳴き声を聞きました。ヤンバルクイナの交通事故が問題になっていますが、沖縄本島の南側からヤンバルにむかってマングースが徐々に分布を広げてきています。ヤンバルクイナの保護には色々問題が多いようです。

ヤンバルの森を車で走っていると、道路に出てくるリュウキュウヤマガメ・シリケンイモリ・アカマタ（無毒のヘビ）などに会いました。幸いハブには会いませんでした。

この日の夕方、一度ホテルに戻ってから、甥と夜のヤンバルにチャレンジ。甥が、ヤンバルの森の固有種であるホルストガエルとナミエガエルの声が聞ける場所へ案内してくれました。闇の中でカエルの声を聞いていたら、リュウキュウコノハズクも鳴いていました。こんな経験は、なかなか出来ないものと感動しました。

沖縄本島・石垣島は海が綺麗です。丁度鳥がさえずる時期で、どこへ行ってもアカショウビン・セッカ・イソヒヨドリが鳴いていました。



千 歳 川

2007. 5. 13

札幌市中央区

白澤 昌彦

今年から、開始時間をこれまでの早朝5時から9時に繰り延べており、その第1回目の探鳥会である。朝5時というと、札幌を3時半頃には出なければならず、通常の探鳥会の時間帯であれば、これまで参加できなかった人も参加できるのではとの考えから変更したものです。ここでの探鳥会は、市内あるいは支笏湖畔に前泊しての探鳥会の後、早朝探鳥会に移行してきています。

さて、探鳥会の方ですが、気温は10度程度と昨年の5度よりは暖かかったのですが、時間が遅いせいか、鳴き声が余り聞かれない。歩き進んでも鳥が出てこない。毎年であるもさっぱりである。出ない、いないといっているうちに、ダムサイトについてしまった。それでもヤマセミが川面を飛翔していくのが見られたり、ツツドリをゆっくり観察したりとそれなりに楽しむことはできた。しかし、カワセミはチーという声しか聞けなかったし、コサメビタキも帰り道にやっと確認できる状況で何かおかしい。エゾムシク

イ、キビタキ、アカハラ、コルリ等見られても良い鳥が多く出ない。種類数は昨年の雨で低温のときよりも少なく、開始時間の問題だけではないような気もする。来年の出現状況が気になるところである。

【記録された鳥】トビ、オシドリ、マガモ、キンクロハジロ、キジバト、ツツドリ、ヤマセミ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、ニューナイスズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス  
以上 36種

【参加者】赤沼礼子 阿部真美、板田孝弘、今村浩史、今村三枝子、岩崎孝博、大島 武、蒲澤鉄太郎、川東保憲・知子、栗林宏三、後藤義民、齊藤由美子、島田芳郎・陽子、品川陸生、清水朋子、白澤昌彦、高橋きよ子、高橋利道、高橋良直、田中 洋・雅子、戸津高保、中正憲佑・弘子、浪田良三・典子、成澤里美、畑 正輔、濱野由美子、浜野チエ子、樋口孝城・陽子、平野規子、広木朋子、真壁スズ子、安 真一郎、山本昌子、山本和昭、横山加奈子、吉中宏太郎・久子、吉田慶子、渡辺幸子  
以上 45名

【担当幹事】栗林宏三、白澤昌彦



## 野幌森林公園

2007. 5.20

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、オシドリ、マガモ、キジバト、ツツドリ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、シメ、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス 以上 30種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、今村三枝子、岩崎孝博、牛込直人、大賀 浩、香川 稔、蒲澤鉄太郎、川口 勉、後藤義民、小西美美枝、斉藤、品川睦生、高田征男、高橋利道、竹田芳範、田中志司子、田中 洋・雅子、戸津高保、長尾由美子、中正憲信、成澤里美、畑 正輔、浜野チエ子、濱野由美子、原 美保、辺見敦子、真壁スズ子、松木 修・ゆう子、松原寛直・敏子、宮崎嵩司、安 真一郎、山田良造、横山加奈子、吉中久子、渡邊 偕 以上 39名

【担当幹事】後藤義民、松原寛直

## 鵠川河口

2007. 5.27 広 報 部

鵠川河口探鳥会はずっと何年もはかばかしくない結果に終始していました。それでは鵠川河口にシギ・チドリが来なくなったのだろうかという、必ずしもそうではないようです。毎日のように河口周辺を見ている地元の人たちによれば、往年に比べると確かに少なくなっているけれども、随分と多く見られたり、希少なものが見られたりすることもあるとのこと。その例の一つは前々号掲載の「鵠川河口で希少3種」にも載せられています。

そもそも渡り時期のシギ・チドリの飛来状況には日や時間によって大きなばらつきがありますから、春や秋に2、3回だけ、しかも2時間程度だけで、たくさんの鳥を見ることができるとは運が相当に味方しなければならないのかもしれない。

この日の探鳥会には大運がついていたようです。天気が良くなく、参加者はいつもの半分程度でしたが、迎えてくれたシギ・チドリはたくさんでした。何にも増して圧倒されたのはトウネンの大群でした。総数で1,000羽を優に超えるときみなされる群れが、ときに一つになり、また、ときには二つ、三つの群れに分かれて飛び交い、そして一斉に岸近くに降りる様はまさに壮観でした(写真参照)。

トウネン以外にも、メダイチドリ1、オオソリハシシギ8、チュウシャクシギ18、キアシシギ2、キョウジョシギ4、ハマシギ9が見られました。最後にはアカエリヒレアシシギ1も出ました。愛護会鵠川河口探鳥会でこれほどの盛況だったのはいつ以来でしょうか。少なくともここ10年ほどはなかったことと思います。

この探鳥会報告には見られた鳥の種類数は載りますが、数は載りません。今回は参加者の方による感想文を掲載する予定が最初からなかったのですが、鵠川河口大盛況の様子を残すために広報部で作文をしました。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、チゴハヤブサ、ハヤブサ、マガモ、コガモ、カルガモ、スズガモ、メダイチドリ、キョウジョシギ、トウネン、ハマシギ、キアシシギ、オオソリハシシギ、チュウシャクシギ、オオジシギ、アカエリヒレアシシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、ホオアカ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト

以上 37種



トウネン群翔 高橋良直さん撮影(鵠川河口探鳥会で)

【参加者】伊原悦夫、小山内恵子、門村徳男、小西峰夫・  
美美枝、品川睦生、新城 久、高橋良直、田中哲郎・洋子、  
成澤里美、畑 正輔、樋口孝城、辺見敦子、松原寛直・敏  
子、森本靖子、鷺田善幸 以上 18名

【担当幹事】門村徳男、樋口孝城

## 植苗ウトナイ

2007. 6. 3 苫小牧市 田中 哲郎

JR植苗駅を出発・ゴールとする「植苗ウトナイ」探鳥会に行ってきた。地元苫小牧ですが、参加率のよくない私にとっては5年ぶりのこのコース参加でした。思えば5年前はまだシマアオジが姿をみせてくれました。しかし今年はこちら数年と同様出てくれませんでした。予想通りではあるのですが、綺麗な声を聞かせてくれたそのソングポストを前にして、まったく気配がないのはなんとも寂しいものです。もうひとつのヒーロー「ノゴマ」は声を確認し、なんとか姿も見えました。昼食時にはチュウヒ、ハイタカ、ウグイスに追いかけてられているツツドリ、オオジシギのディスプレイなど盛り沢山に楽しむことが出来ました。いつもは必ずいるホオアカが今回はいませんでした。またコヨシキリ、ノビタキの姿が少ないようでした。そのかわり、キビタキをあちこちで見ました。中には素晴らしくあざやかな色の個体もいました。天気はいまひとつでしたが多くの鳥に会えて満足して帰ってきました。人数が多くて幹事さんは大変でした。お世話になりました。有難うございました。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、チュウヒ、ハイタカ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、マガモ、オオジシギ、オオセグロカモメ、カッコウ、ツツドリ、コゲラ、アカゲラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ノゴマ、ノビタキ、クロツグミ、ウグイス、エゾセンニュウ、コヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジウカラ、ヤマガラ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、シメ、ニューナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 40種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、五十嵐加代子、板田孝弘、今村三枝子、岩崎孝博、岩本英樹、大島 武、大場宏道・範子、川東保憲・知子、後藤義民、小西峰夫・美美枝、品川睦生、高橋良直・美奈子、田中哲郎・洋子、田中 洋・雅子、徳田恵美、戸津高保、長尾由美子、中正憲・弘子、浜野チエ子、濱野由美子、原 美保、平野規子、広木朋子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、山本和昭、山本昌子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸 以上 41名

【担当幹事】戸津高保、鷺田善幸

## 平和の滝

2007. 6. 9 札幌市西区 金谷千賀子

夜の探鳥会、木に止まったフクロウに遭えると期待を持って参加した。夜の会なのできっと1時間半位だと勝手に思

い、気乗りしない夫を誘って集合場所へ。愛護会の方の説明で9時近くまでかかると聞いて、夫は私の迎え役になった。そして夜はやはり鳥の姿を見るのは難しく、さえずりを聞くのが目的とのこと。ちょっとがっかりの出発となった。それでも暗くなりかけた山道を川のせせらぎを耳にして、鳥の声を拾いながら歩いた。見たことのないコルリのさえずりが山の中に響いた。耳を澄ますと遠くから聞こえるのがツツドリの声。同じ仲間のジュウイチが鳴いてくれる時もあるという説明もいただいた。鉄塔の下で暗くなるのを待っていた時、頭の上をヤマシギが2度通り過ぎた。これはラッキーとのこと。考えてみると新緑のこの時期、日中でも鳥の姿を見るのは難しいのに、まして夜はなお更のことだった。私の持ち歩く野鳥の本の中には無かった鳥たちの声を聞いたこと、その習性も教えていただけたこと、大変勉強になりました。そして、暗闇の中を懐中電灯を頼りにみんなで歩くのも普段なかなか出来る事ではありませんでした。「これは三人、四人でも怖いね」などと話しながら楽しい帰路でした。

戻ってみると煌々とライトをつけた車が一台。うれしいのメッカ？の平和の滝で夫が一人、我々の帰りを待っていました。鳥への視野が広がり、野鳥への情熱が更に増してきました。スタッフの方々にお世話になりました。

【記録された鳥】ヤマシギ、ツツドリ、コノハズク、ヒヨドリ、コルリ、ヤブサメ、ウグイス、キビタキ、アオジ、カワラヒワ、ハシブトガラス 以上 11種

【参加者】安藤明子、岩崎孝博、金谷千賀子、北村昌次、高橋良直、田中哲郎・洋子、田中克佳、田中博美、戸津高保、松木ゆう子、村上茂夫、吉中宏太郎 以上 13名

【担当幹事】岩崎孝博、戸津高保

## 東 米 里

2007. 6. 17 石狩市 竹田 芳範

今日は自宅から自家用車で30分くらいかけて、現地に到着しました。すでに、10人前後の方々がグラウンド方向にスコープを向けていました。私もすぐに仲間に加わりました。すると、サッカーゴールの上の角が空洞になっていて、そこへ鳥が餌を運んでいました。オスとメスの親鳥が代わる代わる何度も餌を運んでいました。その場所に巣を作っているのは、コムクドリでした。雨風をしのげる、良い場所を見つけたものだと感心しました。探鳥が始まって30分後くらいに、別のコムクドリのつがいが、コンクリート製の電柱のてっぺんに巣を作り、雛に餌を運んでいるのも見ることが出来ました。この時期は鳥たちは子育てに忙しそうです。今日はノビタキを数多く見られましたが、(私の)13番目にノゴマ(オス)が見られて大感激でした。探鳥を初めて日の浅い私です。去年、イオン緑苑台店の近くの草原でメスは見たのですが、ノドが赤いのがシンボルのオスには今回が初めての出会いでした。誰かが「松のてっぺんに、ノゴマがいる」と言う声を耳にしたときは、「早くスコープの枠にノゴマを入れ、ピントを合わせなければ飛ん

でいってしまう」と焦りました。幸い、小鳥にしては長時間(3~4分)枝先にとまっていてくれたので、他の方にも見せてあげることができました。これだけでもう、今日はいいなと言う気分でした。が、コヨシキリの元気なさえずりや、オオジシギの飛翔も見られ、暑さも吹っ飛びました(そんな訳はありません)。この暑さは鳥たちにはどうなのでしょう?鳥合わせでは、28種類もの野鳥を確認できました。私自身は、カワセミを見られなかったのがちょっと心残りでしたが…。

探鳥会の後はまっすぐ家に戻らず、私の定点観測地点である石狩市民図書館裏の茨戸川に行き、バードウォッチングの復習をしました。川の対岸の木にアオサギの成鳥がとまっています。いつもなら、マガモも何羽も見られるのですが、今日は姿が見られません。帰りかけたとき、川から『バシヤ』と言う音が聞こえました。川には大きなコイもいるので、どうせその音だろうと思いましたが、音が近いので、すぐ近くの中洲の林に双眼鏡を向けると、な・な・なんと青い羽根の鳥が川に飛び込む音だったのです。そう、初めてのカワセミのダイブとの遭遇でした。枝にとまっている姿も写真におさめることもできました。

ちょうど今、日ハムの稲田がサヨナラヒットを打って、9回裏・中日に1-0の勝利を収めました。父の日に、こんな最高のプレゼントをくれたのは誰なのでしょう。ノゴマ、カワセミ、日ハム 万歳!!

【記録された鳥】アオサギ、トビ、マガモ、イソシギ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、カワセミ、アリスイ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、シジウカラ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 28種

【参加者】阿部真美、井上公雄、岩崎孝博、牛込直人、小西峰夫、小堀煌治、品川睦生、高田征男、高橋宣子、竹田芳範、田中 洋・雅子、戸津高保、中正憲徳・弘子、成澤里美、浜野チエ子、濱野由美子、早坂泰夫、樋口孝城、牧田暁夫、松木 修・ゆう子、村上茂夫、柳川 巖 以上 25名

【担当幹事】品川睦生、中正憲徳

## 野幌森林公園

2007. 6. 24

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、キジバト、アオバト、ツツドリ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、コリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ニュウナイスズメ、カケス、ハシブトガラス 以上 27種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、板田孝弘、井上公雄、岩崎孝博、岩月秀範、牛込直人、岡田弘毅、小西峰夫、佐藤

美栄子、品川睦生、田中 洋・雅子、徳田恵美、戸津高保、浪田良三、成澤里美、信田洋子、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、平野規子、広木朋子、辺見敦子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、安 真一郎、山本和昭、山本昌子、吉村望、渡邊 偕 以上 32名

【担当幹事】早坂泰夫、松原寛直

## 福 移

2007. 7. 1 札幌市東区 金子 雅美

石狩川の下流に猛禽類の野鳥が生息しているとの話を聞き、生態系ピラミッドの頂点に位置する猛禽類の鳥が我家からあまり遠くない場所で見ることが出来るのでは?との思いで、初めてこの探鳥会に参加しました。

当日の天候は、青空で心地よい風が石狩湾から吹いており、日差しもあまり強くなく、非常に良い天候に恵まれました。石狩川の堤防に行くと、数羽のトビが青空を舞っており、トビの中に飛ぶ姿が攻撃的なV字飛行をする2羽の鳥を見る事が出来た。近くの参加者から「チュウヒ」でタカの仲間であると教わりました。さらに、先へ行くと「チゴハヤブサ」が西の方向で飛行していることを聞き、双眼鏡で見ると氷上を滑るように飛行しているのが観察されました。

鳥はこの時期、子育ての期間で、えさを啜えた小鳥が道路の上で、私達を警戒して雛の所へ行こうか、どうしようかと迷っているのを見ると、大型の野鳥を見るのと異なり、愛しさを一段と感じる情景でした。

初めての探鳥会で、沢山の野鳥を一度に見る事が出来ましたが、家に帰ってチェックリストを見ると鳥の姿が思い出せません。野鳥図鑑を出して忘れないよう復習の日々が続いています。

参加者の皆さんから丁寧な説明をいただきありがとうございました。とても楽しい探鳥会でした。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、チュウヒ、チゴハヤブサ、マガモ、オオセグロカモメ、キジバト、カッコウ、カワセミ、アリスイ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、ウグイス、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上 34種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、板田孝弘、井上公雄、岩崎孝博、金子雅美、蒲澤鉄太郎、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、品川睦生、高木久林、高田征男、高橋利道、竹田芳範、田中 洋・雅子、戸津高保、成澤里美、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、松原寛直・敏子、紅葉昭彦、山田良造、山本和昭、山本昌子、吉中宏太郎・久子、吉村 望 以上 33名

【担当幹事】岩崎孝博、早坂泰夫

## 野幌森林公園

2007. 7. 8

【記録された鳥】 カイツブリ、トビ、ハイタカ、キジバト、アオバト、ツツドリ、カワセミ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、ヒガラ シジウカラ、ヤマガ

ラ、ゴジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、ニューナイスズメ、ハシブトガラス 以上 28種

【参加者】 青山洋子、阿部真美、井上公雄、今村三枝子、牛込直人、大賀 浩、小西峰夫・美美枝、小堀煌治、高田征男、田中 洋・雅子、高橋利道、高橋、竹田芳範、千葉久子、戸津高保、成澤里美、信田洋子、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、平野規子、広木朋子、辺見敦子、松原寛直、安 真一郎、横山加奈子、吉中宏太郎・久子 以上 30名

【担当幹事】 小堀煌治、成澤里美



### 【石狩川河口】(再掲)

2007年9月30日(日)

前号(第148号)をご参照下さい。

### 【野幌森林公園】

2007年10月14日(日)、

11月4日(日)、12月2日(日)

初秋から晩秋の野幌森林公園を楽しみます。夏鳥たちはほとんど渡去し、カラ類やキツキ類などの留鳥が主体となりますが、12月初めにはツグミやマヒワなどの冬鳥も見られます。晩秋の頃から木々の葉も落ち、鳥は見やすくなります。木の実を食べるエゾリスの愛らしい姿も見られるかもしれません。

集 合=野幌森林公園大沢口 午前9時

交 通=新札幌駅ターミナル発

夕鉄バス(文京通西行)大沢口入り口下車

JRバス(文京台循環線)文京台南町下車

各徒歩5分

### 【宮島沼】 2007年10月7日(日)

宮島沼はマガンの秋の渡りの中継地として重要な場所です。例年9月下旬頃から渡来が始まり、この時期にピークを迎えます。春の渡り時期に比べて、宮島沼での滞在期間は短く、また群れも大きくはなりません、それでも2万羽から3万羽になります。マガンの他にも、ハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類なども見られます。少数ですがシギ類も見られることがあります。

集 合=湖畔 午前10時

交 通=岩見沢駅前ターミナル発

又はJR石狩月形駅前発

中央バス(月形行又は岩見沢行)

大富農協前下車 徒歩10分

### 【ウトナイ湖】 2007年11月11日(日)

冬を間近にし、湖面にはこれから南へ向かったり、近郊で越冬するハクチョウ類、オナガガモ、ヒドリガモ、カワ

アイサなどのカモ類が浮かんでいます。マガンやヒシクイも見られます。オジロワシが対岸の木にとまっているかもしれません。湖岸をサンクチュアリのセンターまで歩きます。途中の林では渡り途中の小鳥たちが見られることもあります。

集 合=鳥獣保護センター前 午前9時30分

交 通=千歳空港発道南バス苫小牧行

ウトナイ湖下車 徒歩1分

## 鳥民だより

### ◆記事訂正とお詫び◆

前号(第148号)掲載の池田亨嘉さんによる「餌付け・餌やりについて考える」で、以下の校正間違いがありました。池田さんおよび会員の皆様にお詫びして訂正します。6ページ右段の上から4行目

誤：自らが普及したマナーを徹底し、水鳥についても論議をすることができます。

正：(財)日本野鳥の会は、自らが普及したマナーを徹底し、水鳥についても論議をすることができます。

(太字にした部分が欠落していました。)

### ◆野鳥カレンダーの販売◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前の入ったカレンダーを販売いたします。印刷予定数は70部で、価格は1部1,200円です。早めにお申し込みください。

お渡しは11月のウトナイ湖探鳥会と、12月の野幌探鳥会になりますので、必ずお受け取りください。申し込み時に受け取り場所もお知らせください。

申し込み先 戸津 831-8636 (FAXも同じ)

小堀 591-2836 (FAXも同じ)

### 【新しく会員になられた方々】

坂井 伍一・俊子 札幌市手稲区

辻 雅司・方子 札幌市北区

【北海道野鳥愛護会】 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>